

昭和35年度調査研究概況

I

1、唐招提寺総合調査（美術工芸、建造物、歴史研究室）

2、平城宮跡発掘調査（建造物、歴史研究室）

以上の概要については本文参照。

3、大和条里制の調査研究（歴史、建造物研究室）

平城京の条坊制を明にするためには、単に京内に止らず、広く大和国の条里制と関連させて研究を進めることが重要である。このためまず大和国の条里制資料を蒐集整理することとしたが、35年度においては、特にパンチカード利用による文献資料の蒐集に主力を注いだ。カード作製が終つたのは大日本古文書中の東大寺文書である。

4、電気比抵抗法による埋蔵遺跡の調査（建造物、歴史研究室）

この調査は電気比抵抗法によつて地下埋蔵遺跡の状態を探知しようとするもので、測定には横河電機製作所製L-10型大地比抵抗測定器を使用した。まづ昭和35年4月、既知の遺跡（既に発掘調査済）飛鳥寺から着手した。

その目的は電気探査の結果と発掘調査の結果とを照合することにより、既知の遺跡がどのような数値又は図表となつて現われるかを検討し、どの程度探査が可能であるかを検討するにあつた。その結果か

なり有効な補助手段になり得ると考えられるに至つた。そこで昭和35年12月東大寺知足院庭園遺蹟を調査した所、滝の石組の下方に於いて地山が約50釐下がっており、池が流れ様のものゝ存在を推定し得たし、一部試掘によりその実際の状態をも確認し得た。ついで昭和36年1月法金剛院庭園遺跡で探査を行つたが、現存する池を含めて、旧園池はかつて滝下までのびていたことが判明した。この結果は同寺所蔵の古図にも符合するものであつた。現在の所遺跡の電気探査はまだ実験段階にあり、解析の結果得られた電気的数値と遺構との相関関係を求めるには至つていないが、今後数多くの事例に当れば、やがてより正確な結果が期待されるものと考えられる。

5、仁和寺の研究（美術工芸、建造物、歴史研究室）

昭和33・34兩年度にわたり、仁和寺所蔵古文書・聖教類の調査を行つて来たが、35年度においては、文部省科学研究費交付金を得て、京都国立博物館に協力して広く仁和寺の調査を行つた（研究題目「仁和寺における美術史料の調査とその研究」研究代表者 京畿国立博物館学芸課長梅津次郎氏）。当研究所より参加したのは森蔵、杉山信三、守田公夫、田中稔の四名で、それぞれ仁和寺境内および庭園茶室の実測、仁和寺南院（常樂伽藍）遺跡発掘、工芸品、古文書寺誌資料の調査研究を行つた。

II

1、美術工芸研究室・彫刻

概要は前掲の「とくで」である。

2、美術工芸研究室・工芸

昭和29年工芸室が発見し同三十六年三月国宝に指定された唐招提寺レースに本年度は材質の物理学的、化学的検討を加え、大陸との関連性を実証し得て研究の最終段階に漸く達した。

能衣裳と小袖の研究の一環として伊丹市の前田家に所蔵されてある能衣裳、能面の調査を実施し、実測、撮影、調書作成をなした。前田家の衣裳および能面は年代的には江戸初期より中期頃迄の作品であるが、保存よく作風も秀れ、その年代の代表的作例と見られるものが多く近世初期における能衣裳、能面の好資料である。

又前々より舍利塔および厨子の研究を行っているが、35年度においても引続き調査研究を進めた。このほか、伊勢市教育委員会の依頼により伊勢市内の美術工芸作品の調査をした。

3、建造物研究室・遺跡庭園

建造物研究室遺跡庭園班では、かねてから京都諸大寺寺地調査、小堀遠州及びその流派による建築庭園の研究を行って来たが、昭和35年度に於ては左記調査を行った。

4月 知恩院庭園の実測調査

5月 滋賀県栗田町佐治家所蔵小堀遠州関係古図

古文書等調査

昭和35年度調査研究概況

6月 興福寺旧境内実測調査

7月 旧一乗院（奈良地蔵）実測調査

7月9日 春日神社境内を含む奈良公園実測調査

7月12日 唐招提寺旧境内実測調査

8月 二条城一の丸庭園実測調査

9月 大徳寺大仙院庭園実測調査（大仙院方丈廻廊修理工事に関連した調査）

昭和36年3月 嵯峨山（西万院山城跡）実測調査

4、建造物研究室・建築

(1)解体修理に伴う調査

法隆寺東室に引続き、奈良県教育委員会によつて妻室の解体修理が行われ、建築室はそれに協力した。妻室の古材から旧小子房の部材が発見され、その結果、東室（旧大房）の1房2間に對し、又首組の構造をもつ1房3間の小子房が知られ、また発掘によつて、旧小子房は、東室により近い位置に平行に建てられていたものが、室町時代に東に離され、さらに慶長6年に現在地に規模を縮小して再建されたことが明らかにされた。

回西寺館房跡の調査

指定史蹟西寺の指定地域に接して、その東側に防火用水槽敷設工事が行われ、礎石を発見した。京都府教委の委嘱をうけて、設置地点のみに限り、35年6月に建築、考古共同して調査した。遺構は推定講堂の東にあり、南北に長い梁間3間の建物の一部でこれは僧房と考えられる。

の島羽離宮跡の発掘調査

名神高速道路が本遺跡を過ぎるので、33年度にこの遺跡全体の地形調査を行ったが、工事が着手された本年度には路線中及近傍の遺跡を35年7月と12月、36年2月の3次にわたり発掘調査した。その結果、さきに北殿跡と推定された地点は鴨川の汎濫で遺跡は存在せず、南殿跡には明確なものなく、田中殿跡には、礎を敷き重ね基礎地業とした建築趾三ヶ所がのこっていることを検出した。

5、歴史研究室・考古

新堂庵寺の発掘調査

大阪府富田林市新堂庵寺は、前年の予備調査によつて瓦積基礎が発見されていたが、昭和35年9・10月、大阪府教育委員会によつて本調査が行われ、考古・建築両室がこれに参加した。

発掘結果

南北一直線上に塔・金堂が、その西に前記瓦積基礎をもつ仏殿があり、また金堂北にも一建物があることが明らかになった。なお、顔例をみない南門形極先瓦や鬼面文隅木蓋瓦が出土した。

6、歴史研究室・古文書

前年度に引続いて興福寺所蔵の古文書、經典類の調査研究を行った。また西大寺文書の調査にも着手し、一部について調査、写真撮影を行った。7月には毎日新聞社による高野山文化財総合調査に参加し、靈宝館、宝亀院、桜古院、無量光院、常善院、天徳院、不動院その他の古文書典籍類を調査したが、多くの偽品が見られた。12月には文化財保護委員会による東寺御影堂倉の宋版一切経調査に協力した。